秋 葉 区

九条の会

№29　2010.8.31

秋葉区「九条の会」事務局
新 津 教 育 会 館 内
新潟市秋葉区善道町２－９－44
Tel 0250-21-3691　Fax 0250-21-3692
http://9jo.iinaa.net/

秋葉区「九条の会」　結成５周年のつどい

と き　12 月 5 日（日） 13:30～
ところ　秋葉区新津健康センター　はつらつホール

記念講演　この目で見てきた戦争と憲法9条

報道写真家　石 川 文 洋 さん

2005 年 12 月 10 日、「新津・小須戸９条の会」が結成され、まもなく５周年を迎えようとしています。事務局では、「秋葉区九条の会、結成５周年のつどい」を計画し、記念講演は報道写真家の石川文洋さんにお願いしました。「５周年」というメモリアルの「つどい」になるように準備を進めていきたいと考えております。会員の皆さまの大きなご支援をお願いいたします。

プロフィール

1938 年　沖縄県那覇市首里に生れる
1964 年　毎日映画社を経て、香港のファーカス・スタジオに勤務
1965 年～1968 年　フリーカメラマンとして南ベトナムのサイゴンに滞在
1969 年～1984 年　朝日新聞社カメラマン
1984 年～現在　フリーカメラマン

証言ドキュメンタリー番組がかくしたもの－加害と被害－

星山　圭（新津本町）

良心的な番組？　今年も８月15日を中心に、沢山の戦争についての番組が放送されました。（ＮＨＫ）「幻の甲子園－戦時下の球児たち」「被爆者の子に生まれて－肖像写真 100 枚に混める２世の決意」「玉砕－封印された全滅作戦への軌跡」「戦地からの手紙」。番組の総数は 38 本、どの番組も戦場にかりだされた兵士や残された家族の苦労を当事者の証言をもとに描いて感動的でした。また、戦争指導者の愚かさを暴いた「ベニヤ板の特攻艇震洋」。軽くするために船体はベニヤばり、その中にエンジンと爆薬をつんで敵艦に体当たりする、帰ることを考えない死の出撃です。そんな舟だから途中でばらばらになったり、爆発したり、生き残った兵士が「マンガだ」と吐きすてるように言ったのが印象的でした。

加害はどこへ行った。　しかし、私は感動しながらも強い疑問をもたないではいられませんでした。38 本もの番組の中に、日本の加害＝侵略を正面から取り上げたものがただの”一つもない”、なにかとても異様です。“かくした”といわれても仕方がないでしょう。戦争は加害があって被害がある。両方を見なければ実相はつかめないはずです。日本軍が中国やアジアで何をしたか、奪いつくし、焼きつくし、殺しつくすといわれた蛮行については、無数の証言があって周知の事実です。それをなぜ完全に無視するのか。なにか政治的な判断があるのでしょうか。

戦争でヒドイ目にあったという番組は一見良心的で反戦的です。しかし、自分の被害だけを言って、害を与えたことに触れないのでは、相手の人は納得しないでしょう。愛情に満ちた手紙を家族に書いた兵士をとりあげるなら、同じ彼が平然と中国人を殺すことができた事実にこそ、光を当てるべきではないか。それではじめて侵略戦争の真の姿が分かるはずです。

平和のメッセージ

秋葉区のすみずみまで響かそう、
皆でつなぐ、平和のメッセージを！

抑止力

和泉　功（東町）

六月十五日、新津一小・一中九年間持ち上がりの私達は、「古希の会」を持ちました。小中と学校は一緒ですが、同じクラスでなかった人もいます。しかし、そこは同学年「久しぶり、五十年ぶり」と酒は進み、話は弾みました。

私と同室になったＫさんは、東京大空襲の前に新津に移り住んだと、初めて聞きました。戦後、住んでいた街に行って、昔の家並みを思い出し涙したこと、そして戦争は絶対にイヤだと語っていました。そこで、沖縄の米軍基地について聴いてみました。

「沖縄は、終戦から今日まで米軍が居すわり、島民は堪え難い被害を被っている。総選挙で民主党は『国外、最低でも県外』と公約したのに、それを反故にして、自公政権時の辺野古に逆もどり。県民の意思は『基地はいらない。沖縄から日本から自分の国に持ち帰れ』が多数だ」と私。Ｋさんは「今現在は抑止力は必要だと思う。相手（？）が攻めてきたら、防御のためたたかなくては守れない」と。私は「どこの国が攻めて来るのか。憲法九条を堅持する日本国民は、平和主義に徹し、どこの国とも、特にアジア近隣諸国と友好な関係を築き、武力に頼らない外交が重要」「抑止力と云いながら米軍の行動は、イラクやアフガンへの軍事介入、侵略力だ」。そして抑止力は、相手の武力行動を武力で阻止する事。次から次へと“武力には武力”の連鎖となり、問題の解決にならないと。等々話し合い、最後にＫさんは「武力に対し武力で応じていれば、確かに終わらないと思う。私は当面抑止力でということで、最終的には武力はなくさなければと思う。戦争は絶対にイヤだから」と云っていました。

終戦記念日の八月十五日付け、新潟日報社説『武力には武力』では、「米国の銃社会と相似形だ。核抑止論もこの延長線上にある。」「私たちも声を上げ続けたい。憲法九条がないがしろにされてはならない」と云っています。

いまも忘れない

板橋　晃子（新町）

なにやら人の気配がして目を覚ますと、あたりは真っ暗で、部屋の隅に、ぽっと小さな灯りが見えました。蚊帳の中を、這うようにして近づいていくと、ラジオがついていました。母がラジオを聴いていたのです。

「今、長岡が、空襲なの。お祖母さんたちの無事をお祈りしよう。」母の言葉に、祖母やいとこたちの顔を思いうかべながら、声は出さずに必死に祈りました。

まもなく、近くの桑畑へ見に行っていた小学生の兄たちが戻ってきて、興奮覚めやらず、家中騒然となりました。いまも忘れない、４歳の六日町での、あの夏の夜のできごとです。長岡方面の夜空は真っ赤で、その中に細かなたくさんの赤く輝くつぶつぶが降っているように　見えた。あれが、焼夷弾だったのではなかっただろうかと、後になって聞かされました。

この空襲で、祖母たちは、家は焼け落ちたものの、無事でした。しかし、出征していた母の弟の家族、叔母と２人の子どもは、門辺に斃れ果てていたことが、確認されました。幼子２人抱えて戦火を逃れることは、できなかったのです。

涼風のたつ頃、叔父は朝鮮から帰還しました。胸に飛びついて迎えるはずの家族は、誰もいなかったのです。長岡駅に降り立って、一面の焼け野原と化した街を見たとき、もしやと覚悟したと、語ったそうです。しばらく親戚の家に逗留していた叔父は、部屋に一人ぽつんとうなだれていたそうです。その後ろ姿には、どんな言葉もかけることができず、ただそっと見守るしかなかったと、母は言っていました。

先の大戦では、数百万の命が、失われました。かけがえのない命が絶たれた数だけの悲劇があったのです。叔父はその後再婚し、新しい家庭を築き、94 歳の天寿を全うしましたが、終生癒えることのない悲しみを負っていたと思うのです。

イギリスでは今、イラク戦争への参戦が正しかったかどうか、国を挙げて検証に取り組んでいます。残念ながらわが国では、こうしたことはされてきませんでした。65 年経った今からでも遅くはない。きちんとした検証がなされ、再び悲劇を繰り返さないことが、犠牲となった人々に報いることと思うのです。